

第83回 東葛しぜん観察会

互井さんの夏のトンボ教室

互井賢二(市川市)

日時：2012年8月4日（土）10～14時 天気：晴れ時々曇り

場所：行徳緑地特別保全地区・行徳野鳥観察舎（市川市）

講師：互井賢二氏（房総蜻蛉研究所代表）

担当指導員：勝田信喜 田中玉枝

参加者：大人11名、子ども3名、指導員17名

当日のお天気は、晴れではあるが、集合時間前に「にわか雨」が降るなど、単なる快晴の晴れとは違い、少し不安定であるだけ、また風も少し吹くなど、真夏の観察会とはいえ良好なトンボ観察会であった。一同は3班に分かれ、行徳緑地特別保全地区に入つて行く。この時期には入口近くの空間にはコシアキトンボが上空を舞うのであるが、この日は何もいらず、更に入つてすぐのコンクリート空間には、シオカラトンボがいるのが通例であるが、その姿も見えず、入つてからの直線道路の際の植物にはノシメトンボの未熟がいるはずであるにもかかわらず、その姿もなく、トンボが少ない状況を示していた。

本日の「最重要種」で、配布資料の「表紙」を飾った種であったアオイトンボの♀がようやくその生息地近くで発見され、そのメタリックグリーンの美しい体色を一同で確認する。

また、アジアイトンボの♀と思しき未熟♀が捕獲される。この未熟♀はアオモンイトンボと大変紛らわしい状況で、腹部背面の黒条のあり方から判別するものの、「紛らわしい」として今、問題になっている「課題」であり、午後のレクチャーにも持ちこされる内容であった。

行徳緑地のこの地も、先の大地震により亀裂が入るなど、水田も水がなくなり、本来ある池の水が無くなるなど、その影響は計り知れないものもあった。未だに「立入禁止」地区がある状況で、そうした地を迂回しつつ、元水田の池にたどり着く。そこはトンボ王国であった。シオカラトンボが飛び交い、ショウジョウトンボの真っ赤な姿が青浮草に覆われた池に映える。ギンヤンマが飛び、ウスバキトンボのオレンジ色が目立つ状況であった。それぞれが網を持ち腕をふるう。網はあるものの途中では網を振る機会もほとんど無い中、ここでは思い切り網を振ることが出来る喜びを感じつつ、トンボと「対峙」している姿があちこちのあり、まさにトンボと人間の格闘状況であった。ギンヤンマは大きく勇壮ですばしこいので、皆が注目しているものの、なかなか網を振る所まで近寄ってくれない頭の良さが、本種の「憧れ」に繋がる所以であった。

注目しているうちにギンヤンマ♂は♀を見つけ、連結・交尾にいたり飛び始める。そして池の真ん中の草に掴まり、連結産卵を始める。それを長竿で捕獲、皆でギンヤンマを確認する。

昼食を挟み、午後のレクチャーに入る。当日見られたトンボ達を確認し、その後「トンボの世界」に入る。その発生から現在に至るトンボ史を通観し、現在も生息する「生きた化石・ムカシトンボ」を標本で確認する。

日本最大のオニヤンマ、最小のハッショウトンボ。そのハッショウトンボを標本でその大きさをスケールを当てて児童に確認してもらう。小さい！ 可愛い！ 標本での感動の確認であった。午前のフィールド観察会に、この午後のレクチャーが付随し、内容を深めることで「互井さんの…」とするこのトンボ教室の特質である。市川市南部の貧相な自然環境の中、その中で基幹的中心に位置する行徳緑地を保全する重要性を確認し、終了した。

